

経済産業大臣指定伝統的工芸品

きしゅうへらざお

紀州へら竿

伝統マーク 平成25年指定 / 指定された地域(橋本市、九度山町)

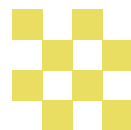
日本の粹を集結した究極の道具

和歌山県の最北端に位置する橋本市。かつて紀の川を使った木材の運搬が盛んで、高野山の宿場町としても栄えました。隣接する奈良の大和街道との交わりもあり、県境を越えた文化交流も特徴のひとつ。長い歴史の中でゆっくりと交り合い、独自の文化を育んできました。その中で日本一を極める「紀州へら竿」は技術を高め、技法を継承してきました。天然竹を使ったへら竿は、そのほとんどがこの地で生産されています。



紀州へら竿 和人
● 紀州へら竿師
田中 和仁さん

昭和43年生まれ、橋本市出身。紀州へら竿の産地に育ち、子どもの頃から釣りに精通。大学卒業後、県外で大手企業に就職しましたが、紀州へら竿に魅せられ29歳で帰郷。伝統の技を一から学び35歳で独立。現在、紀州製竿組合の組合長として、普及に努めています。



130年受け継がれる竿師の技法

「紀州へら竿」とはへらぶなを釣る専用の釣り竿のことです。へらぶなは、古くから日本各地に分布しており、中でも大型のものが、琵琶湖水系に生息していました。へらぶなを釣るために釣り人は、餌を配合し、浮きを繊細に工夫し、そして極めつけは、魚との力強い引き合いを楽しむために専用の釣り竿を考案しました。紀州へら竿の起源である創始者の初代竿正が、大阪でへら竿を作り上げたのが明治15年。現在に伝わるへら竿は、火入れした竹を継いだこと、竹を丸く削った穂先、玉口の絹糸や漆、中を抜き細いパーツをしまうこと、持ちやすい握りをつけたこと、それらの技法が今なお受け継がれ、後継者へと脈々と技術を継承しています。

職人の高度な技術が生む釣り味の妙

紀州へら竿は真竹、高野竹、矢竹の3種類の竹を主に使用し、それらを組み合わせて1本の釣り竿を制作します。原竹の切り出しから生地組み、漆塗り、完成までほぼすべてが手作業。ひとりの職人が約1年がかりで仕上げます。最大の特徴は、紀伊山地の標高700~900mに自生する強靱な高野竹を中心とした原竹の使い方と、職人の高度な技術。紀州へら竿は、細くしなやかに仕上げられた竹の良さを最大限に生かし、水中にいるへらぶなの動きを釣り人の手に伝えます。匠の技と良質の竹で作られた紀州へら竿は、自然の中で魚との駆け引きを楽しむ究極の遊び。手のひらに伝わる感覚が魅力です。



自然を相手にする伝統的工芸品の魅力

「現在、橋本市には44人の組合員がいます。それぞれが自分の銘を持ち、制作しています。これまでの技術を研鑽することで、紀州へら竿はブランドを確立してきたのです。」そう話すのは、「和人」の銘をもつ紀州製竿組合組合長の田中和仁さん。紀州へら竿の愛好者は関東を中心に全国にいます。近年では、韓国や台湾など世界的にもへらぶな釣りは広がりつつあります。「道具を愛し、釣りをよく知るお客様の要求は高く、2つと同じものがない原竹を、お客様の要求に応じていくことが、やりがいです。まさに一生の仕事です。」と話してくれました。

【紀州へら竿の制作工程】



「穂先(竿先)」は真竹、「穂持ち(二番目)」は高野竹。「三番」や「元」は矢竹を直す火入れの作業。「ため木」と呼ばれる専用の道具を使って矯正し、竹のもつ反発力を高めます。



穂先は刃とヤスリを使って、最適なバランスが出るまで削り込みます。握りには籐や乾漆、螺鈿などの伝統的手法を取り入れ、意匠を凝らします。

紀州製竿組合の取り組み

へらぶな釣りの愛好者は全国で100万人ともいわれ、重量を競う大会も各地で開催されています。日本一を誇る紀州へら竿の町として、130年以上続く技術の継承はもちろん、販路の拡大も大きな課題になっています。紀州へら竿が実用的な釣り道具であるよう常に研究を重ね、紀州製竿組合では研究池「隠れ谷」を運営しています。隠れ谷は一般にも開放し、へらぶな釣りの普及場にもなっています。紀州製竿組合では年間を通じて、紀州へら竿の釣り大会となる「竹竿の祭典」、学校での「釣り教室」「竿作り教室」など幅広い活動を実施し、へらぶな釣りや物作りの楽しさ、難しさを広めています。紀州へら竿後継者育成の取り組みとして今年度より「工房」を開設。現在、後継者を募集しています。「工房」では、紀州製竿組合のへら竿師が講師陣となって、後継者の指導にあたります。組合全体で後継者を育てようという積極的な取り組みです。

